

不安、孤独をバネに明るく広い世界へ

栗田好子詩集『ありがとうの色』を読んで

洲 浜 昌 三



長い間、詩を書いていれば、「何のために書いているのだろう」と思うことがよくある。スポーツや音楽のように、日々熱心に練習を積み上げ、達してチームに貢献でき、大勢の人に成果を楽しんでもらえる、という訳ではない。苦しんで一篇の詩をつくっても、反応はほとんどない。たまにあれば厳しい批評。詩人になるためなら、それも耐える意義があるだろう。そうでない場合には、何のために書くのかという疑問や迷いが頭をもたげてくる。

「何のために詩を書くか」。答えは人によって様々だろう。一人で三つも四つも答えがあるかもしれない。しかしいろいろ考えてたどり着くのは自分のため、としか言いようがない。その時々、喜怒哀楽を詩という形で表現する。それがたまたま合っていると思っただのかもしれない。

しかし、自分のためにだけ書いていると息苦しくなってくることもある。

詩集『ありがとうの色』を手にしたとき、どんな色だろう、と想像し、楽しくなった。感想を書いてお礼の手紙を出すと、ハガキが届いた。その中に次のような言葉があった。

「本気で書いた積りのない詩ですが、七十歳にして詩に助けられたような気がします」

この言葉が胸に響き、とてもうれしかった。迷ったり苦しんだり休息したりしながらも、長く書き続けているうちに、年齢や時代、環境の変化とともに、予想しなかった状況にも出会い、新しい境地に達する。

栗田さんの言葉に出会って、徒労にも思えた長年の詩作が、喜びの肯定に変わったことを知り、何よりうれしかった。

栗田さんの詩歴は長い。初めて栗田さんの詩を読んだのは、昭和四十四年に創刊された『日本海文学』である。同人は七名で発行者責任者は池野誠さん。当時ぼくは二十台後半、小説を書いていた。

雲田(旧姓)好子さんは若き二十代前半、二篇の詩を発表している。題は、「不安」「孤独の闇が泣く」。一部の詩句を引用してみよう。

「く有限なる己の存在に／空の青さが虚しく映るく」「怠情と名を呼ぶ輪の中で／ぐるぐる回り続ける己の存在」

題からも分かるように、不安、孤独、虚しさ、惰性等々、自己凝視から生まれる抽象的、象徴的な詩である。これはその後も一貫して栗田さんの詩の底流として流れ、時々岩盤を突き破って出てくる。

自己の暗闇を凝視する無意識の衝動は、逆にいえば、明るい自然や希望への衝動が強いからだともいえる。「空の青さが虚しく映る」のは、本来の意識では、「空の青さは絶対で無限」だからである。

栗田さんの詩には自然を生き生きと受け止め、詩にした作品も多

い。今回の詩集の巻末には、当時山陰中央新報に写真付きで毎月連載された一連の「島根の詩」の中から、雲田好子さんの詩二篇が写真付きで載っている。一篇は宍道湖をうたった「ふるさと」。もう一篇は「秋」で、その中の一節を引用してみる。

「秋を知ったのは／チューリップの／装いからではなく／山野のす  
すきの囁きに／ふと流した淋しくもきらめく／涙の温もりから」

自然そのものをうたいながら、そこには「人の心」や「喜怒哀楽」が背後にしっかりと流れている。これも栗田さんの詩の特徴である。

数少ない栗田さんの初期の詩から感想を書きはじめて、それは理由がある。五十年以上に渡る栗田さんの詩を、今回再読してみて、詩のエレメントや原型は、二十代初期の詩の中に厳然として存在している、と思ったからである。

栗田さんの詩は、初期には抽象的で難しい表現の詩も多いが、徐々に内面的な世界より、日常の具体を素材にして生まれる場合が多くなつていき、難解な詩は少なくなる。しかし、平易に思える詩の中にも、ふと、作者独特の抽象的で象徴的な表現が出てくることがある。そこには独自の心象風景があるにちがいない。そのルーツは、最初に紹介した初期の詩に見える自己凝視にあるのではないかと思う。このために詩の奥行きが深まり広がり陰影が生まれてくる。

平成二十四年の詩集『透きとおったときよ』は、二人の子どもさんが自立された時に上梓された。いま読んでも心を打つ詩が多い。

この詩集も素敵なタイトルだったが、その時「透きとおったとき」とはなんだろう、と読み終わってぼくは考えたのだろう、次のようなメモを詩集の空白に記している。

「透きとおったとき」とはどんな感覚なのだろう。子育てにま

つわる家事、日々の苦勞。それがなくなった後の孤独、悲しさ、寂しき、いつか子供たちにも自分のことが分かって欲しいという願い。そういう自己を越えた永遠、普遍への、思い、なのだろうか。生命への限らない慈しみと孤独な世界が同居している世界、時なのだろうか。それが栗田さんへ詩を書かせるのかもしれない」

今回の「ありがとうのいろ」は二十七篇の詩と、資料として新聞に掲載された詩二篇、高田頼昌さんの詩集紹介文「ほのかな夢への問いかけ」が掲載された六十一ページの詩集である。「高津川の恵み」のように純粹に自然を素材にした作品はこの一篇だけだといつてもいい。作者の興味や関心が向いているのは「人の心」なのだろう。前述したように、自己凝視から生まれる不安や孤独などに目を向けた作品と孫や日常を主題にした肯定的で明るい作品は、ほぼ半々である。

「私の夢は ポツンと置かれた／使う人のいない灰皿／出ない煙を  
吸いながら／身を縮め 病み続ける心」(「冬の化石」)

「崩れるのをためらって／限りなく遠のいていった私／巡っては繰  
り返され続けた私の孤独／平凡な日々の中で／押しつぶされまいと  
踏み出し続けた三十八年／確かなことは／娘や息子 そして孫達の  
ために／台所に張り付いた日々」(「身構えて」)

「何時会っても 言葉が通じない」で始まる「母」は、認知症の  
義母の世話を長年してきた日常の中から生まれた壮絶な叫びであり  
悲しみであり祈りである。

「老いるという 残酷な現実／私を支えてくれた 母の美しさと  
強さが／時間の中で滑り落ちていく」

「古ぼけた台所に ポコポコの大鍋が磨かれて／凜として 存在

を放っていた／遠いあの日」

「思わず涙が溜まると／途切れた 記憶の向こう側／必死に繋がつている／母と私／いや／祈りに似た私の念い」

悲痛な悲しみの究極には、祈りしかないのである。祈りは追い詰められ行動も言葉も限界にきたときの最後の救いの手段である。痛切な思いが、端正な言葉で詩に結晶されている。不幸をうたつても救われる思いがするのは、洗練された光る詩句が適切に置かれているからである。

今回の『ありがとうの色』は、「読書好きの初めての孫が、高校三年生。日々関わり続けてあつという間の十七年間。そんな彼女に高校の卒業祝いに私の詩集をプレゼントしようと思つて」作成した、「あとがき」にある「

長年のおばあちゃんの圧縮された「思いや願いや悲しみや喜び」が詰まつた心や精神が、詩という形になつて受け継がれていく。心が温まつてくる。孫のために書いてきた訳ではない。いつも本気で書いてきたわけではなかったが、自分のために書いてきたことが、自分を生かし、自分の思いが読書好きな孫へバトンタッチされていく。そこから更に広がっていくかもしれない。

「ありがとうの色」とはどんな色だろう。

「十二色のクレパス／赤にほんのり白を加えると／コスモスの花が揺れる／茶に黄色を加えると我が家のプードル犬／在るものはみなそれぞれの色で／生を形づくる／私が生きてきた日々／かかわつた大勢の人々／故障もせず動き続けた私の体／いくつもの柔らかな色と／暗い色が重なり合つて／無数のクレパスの色でおり重なつた／たった一枚の絵が生じる／光があたると／一つひとつの色彩の穂やか

な影が／ほっと ため息をつく／すべての今に ありがとうの色が／遠くとおく広がっていく」

明るい色、暗い色、様々で、別々の存在が重なつて一枚の絵が生まれる。その美しい絵を見ながら感謝せずにはいられない。その気持ちは、遠く遠く広がっていく。どんな色なのかは、限界のある言葉では表現できないが、確かに色が見えてくる。

一人の女性が、歩んできた長い心の軌跡を一連の詩を通して見つめ、触れ、感じ、味わうことができる心温まる詩集である。

(2018. 12 「石見詩人」141号に掲載した書評に若干手を入れた。2019. 1. 30 洲浜)